

Roderick Hudson と The Princess Casamassima における Christina 像

吉田 加代子

Henry James は第二作目の長編小説 *Roderick Hudson* ⁽¹⁾ を1875年に執筆してから、十年後の1885-86年にかけて *The Princess Casamassima* ⁽²⁾ を発表している。*Roderick Hudson* は Rowland Mallet の意識の物語であり、*The Princess Casamassima* は Hyacinth Robinson を主人公とする自然主義的な小説であり、それぞれの作風は全く異なるものである。しかし、Christina Light (*Princess Casamassima*) はこれらの二作に連作に登場するように、続けて重要な役割を与えられて現れる。そしてこの人物像の与える印象は複雑であり、単純に把握できない、捉えどころのないようなものがある。そして作者が “The multiplication of touches had produced even more life than the subject required ……” ⁽³⁾ と感想を語っているように、個性的で、鮮明で忘れ難い人物となっている。そして、本当に自分らしい生き方を求めようと試行錯誤する彼女の人生はいずれの作品に於いても悲劇的に描かれている。様々な登場人物が Christina という人物をいろいろに批評しているが、このような Christina の複雑性、矛盾、そして彼女の人生の悲劇性は彼女の特質に加えて、性格に於ける本質的なものが原因となって生じているものと考えられる。それは自己に対する深い執着心である。ただ *Roderick Hudson* では登場人物の意識は Mallet にのみ焦点が当てられているので、彼以外の登場人物は Christina も含めて言動だけが彼の観察を通して読者に伝えられ、*The Princess Casamassima* では、*Roderick Hudson* のように単独の人物の意識だけが描かれるという描写方法は採られていないが、主に心理まで描かれているのは Hyacinth Robinson であり、他の登場人物に関してはわずかである。よって二作共に於いて前述した Christina の執着心は彼女の内面からではなく、彼女の言動を通して知ることになる。

Christina は複雑で不可解な人物であると述べたが、*Roderick Hudson* では、彼女は様々な人達に様々な捉え方をされていて、そのことが彼女を理解するのに一層難解なものにしている。

まず Mme. Grandoni であるが、彼女は生粋のヨーロッパ人であり、その視点から Christina のことを詳しく説明することができ、Mrs. Light や Giacosa のように Christina の利害のことで直接影響を受けないので、主観は入っているものの、特に Christina の経歴や現在置かれている状況についてはかなり客観的に話すことができ、ある程度信憑性はあると考えられる。

Mme. Grandoni は Mallet に、最高の社会的地位と財産を娘の容姿を利用して手に入れようという野心を持つ母親によって、その目的実現のためにのみ育てられてきた Christina について、
“She’s excessively proud, and holds herself fit for the highest station in the world ……” (RH

p.165) というように自尊心の高さを強調し、それと共に、“Christina, I imagine, has plenty of wit — also plenty of will.” (RH p.164) と、すぐれた美貌と共に豊かな教養に裏付けされた頭脳の鋭さと精神の強さもあると言っている。そして、Christina 本人に直接““Do you know you're very wicked?”” (RH p.311) と言っているように、率直でないことも知っている。更に Mallet には、彼女の心理をかなり詳しく説明していて、以下のように言っている。

She said the life they led was horrible; that it was monstrous a poor girl should be dragged about the world to be sold to the highest bidder. She was meant for better things; she could be perfectly happy without those dreadfulnesses. It was not money she wanted. I might not believe her, but she really cared for serious things — for the good, the beautiful and the true. (RH p.197)

Mme. Grandoni はこのように彼女の表面には現れない美点を語っている。しかし、また、

My own impression is that … she's a mixture of better and worse, of good passions and bad — always of passions, however; and that, whatever she is, she's neither stupid nor mean and possibly, by a miracle, not even false. (RH p.164)

善や悪も、そして健全な精神すらあると言って、単純には言い表せない、矛盾する要素が同時に存在することを語っている。

また同じヨーロッパ人でも彫刻家 Gloriani は、Christina の胸像を見て、“a creature as fine as a flower-stem and yet as full as a flame” (RH p.190) と Hudson の表現した彼女の美を称えると共に、“the macabre maiden of the Christian story” (RH p.190) である Salome を連想している。彼は彼女に美と情熱と悪を見ている。

イタリア人の付添人 Giacosa は、必ずしも全てを語っているとは考えられないが、“… she's very proud …!” (RH p.242)、“A drôle de fille” (RH p.242) と言い、また、Prince Casamassima との結婚については、“… she brings him neither a name nor a fortune — nothing but her wit and her beauty.” (RH p.242) と言っている。要するに自尊心が高く、行動には矛盾があり、枚挙できる美点は頭脳の鋭さと美貌ということである。

つまり、これらのヨーロッパ人達の Christina の美貌への高い評価は一致するところであるが、彼女の内面に関しては、才気煥発ではあるが、自尊心、情熱、強さ、善、悪等が混在し、簡単に表現できない複雑なものだということである。

次にアメリカ人の受け止め方であるが、Roderick は ““The daughter's simply a breathing goddess ….”” (RH p.160) と言って、彼女が彼の芸術作品製作のこの上ない対象となると考え、“the extraordinary perfection of her beauty” (RH p.186) を詳述しているように、最高の美貌の持ち主であると言っている。しかし、性格に関しては、“… there are fifty of her.” (RH p.187) とか “She's a creature of moods ….” (RH p.187) と評して、気紛れであり、不安定で一貫性に欠けることは良く理解している。

吉田：Roderick Hudson と *The Princess Casamassima* における Christina 像

Mrs. Hudson も “Oh, what a beautiful person !” (RH p.338) と一目 Christina を見て、彼女の抜きん出た美貌を認めている。

しかし、ローマにいて Mrs. Hudson より Christina を良く知っているアメリカ人画家 Augusta Blanchard は、彼女の胸像を見て美しさだけではなく、““She looks half like a Madonna and half like a ballerina!”” (RH p.195) というように、彼女の清純な美を称えるだけではなく、演技的要素もあることを見抜いている。Mary Garland も Christina と一度話ただけで、““I think she's false.”” (RH p.384) と行って虚偽を感じている。Mr. Leaventhworth はヨーロッパでは、“… her beauty's of a high order.” (RH pp.300-301) と行っている。

Roderick 以外に Christina と最も頻繁に接するアメリカ人である Rowland Mallet は、彼女の美しさについては、非常に高く評価している。またその美しさからは、“some immaculate saint of legend being led to martyrdom” (RH p.178) という印象も受けているように清純さがあることにも気付いている。更に、以下のように感じている。

There were women, he said to himself, whom it was every one's business to fall in love with a little — women beautiful, brilliant, artful, easily interesting. Miss Light, for instance, was one of these …… (RH p.176)

また、Roderick の製作した彼女の胸像を見て、““It presents a young lady whom I shouldn't pretend to judge off-hand.”” (RH p.181) と行い、また、彼女の結婚後にも “poor Christina's strangely mixed nature” (RH p.450) と行っているように、彼女の性格は才気もあれば手練手管にも長けている、簡単に表現できない、あくまでも複雑なものであると考えている。

結局アメリカ人もヨーロッパ人同様 Christina の卓越した清純な美貌を評価しているが、性格については、気紛れ、虚偽、技巧的等、それぞれ表現は異なるが、率直性を欠く理解の困難なものであると思っている。

このように Christina が複雑な人物であると人々に受け取られ、また様々な見方をされるのは、最初に述べたように、根本的には彼女が生き方を探し求めるのに自己に対して非常な執着心を持っていて、それが殆どの人達に理解されていないことが原因と考えられる。次にそのような執着心は彼女のどのような言動から読み取れるか見ていく。

Christina と Roderick の関係で、大きな転機となるのは、最初は Christina と Prince の婚約であり、次にその解消である。そして最後はスイスでの二人の再会である。最初の2つの時に、Christina は Rowland との会話で、自らの行動の選択決定に関して、その意味、その価値について評価を仰いでいる。そして、最後ではそのような選択決定した彼女の価値基準の崩壊を告げている。

Christina と Prince の婚約発表の少し前に Rowland と彼女は Saint Cecilia 教会で会っているが、その折、彼は Roderick との交際について、彼女は芸術家の妻に向いていないので、彼を放っておいてくれるように頼むと、彼女はそれを承諾することが、非常に優れた行為になるか否か

ということを尋ねている。これはそれまでの彼女と Roderick の交際や、求婚者 Prince が出現したときなど、Roderick と出会ってからこの時点に到るまでの彼女の曖昧な行動を経て、彼女の態度に関する一応の決着を示している。

Ludovisi 邸で Roderick と Rowland が Christina を見かけてから1年後、Light 親子が Hudson のスタジオを突然訪れた後、始めて見たときからその美しさの虜になっていた彼が彼女の胸像を製作するというので、2人は親密になる。

しかし、“the young man of genius … whom I'm not … in love with” (RH p.168) と言って、それ程彼に好意を見せていなかった Christina は、自宅で彼女の結婚相手を見つけることを目的にした舞踏会が開かれた折に変化を見せる。Mrs. Light が Prince を娘に引き合わせると、とたんに彼女はダンスの相手に Roderick を選び、Prince より彼に関心があるような振りをする。このとき Rowland は

Christina and Roderick exchanged a single glance — a glance caught by Rowland and which attested on the part of each something of a new consciousness. (RH p.216)

とあるように2人の新たな関係に気付いている。Prince は Mrs. Light が捜し求めていた社会的地位や称号、財産等最高の世俗的価値を申し分なく持っている人物である。

このような行為の動機については、Prince に会う直前に Roderick について Rowland に以下のように確かめていることから推測できる。

… do you think he's going to be a *real* swell, a *big* celebrity, have his life written, make his fortune, and immortalise — as the real ones *do*, you know — the people he has done busts of and the women he has loved?” (RH p.212)

そして、“… he's one of the glories-to-be !” (RH p.212) と言っている。彼女は Roderick に芸術家として大きな可能性があることを確認しているのである。彼女にとって Prince は人間的な資質については何も考慮されずに、ただ結婚相手としての外面的な条件だけが整った人物であり、彼女の意向は無視されて、母が打算的に一方的に押し付けてきた人物である。ところが Roderick の方は芸術家としての有望な将来が期待できるわけで、人物的には Prince よりはるかに大きな才能に恵まれていることになる。その上、彼には Rowland が “Very interesting” (RH p.214) や “handsome” (RH p.214) と言う婚約者がいることを教えられている。この事実は、すぐれた芸術家が最高の美女である自分のものでなく、他の女性の夫になるということであり、それは自尊心の高い彼女を非常に刺激し、興味の持てない Prince より Roderick を自分に引き付けておこうとしたと考えられる。

次に、Villa Mondragone で、Roderick と Rowland、Light 親子、Prince 達一行が出会ったとき、彼女はイタリア人の Prince がいるにも拘らずイタリアの若い男女の習慣を破ってまで、Roderick と二人だけで長々と人目の届かない木立の中へ姿を隠している。そして再び元の場所に戻って来たとき、

吉田：Roderick Hudson と *The Princess Casamassima* における Christina 像

… there was a faint pink flush in her cheek which she had not carried away with her, and there was certainly a light in Roderick's eyes that he had not seen there for a week. (RH p.254)

と Rowland が気付いたように、製作に於いて不毛の状態であった Roderick に生気が現れ、Christina の方にも感情が高ぶったような形跡を認めている。彼女は Prince の莫大な資産や社会的名誉を嘲笑し、求婚者を途方に暮れさせ、Roderick とは二人で人々の視界から消え去る。強制された結婚相手からは遠去かる態度を示し、婚約者のいる Roderick には好意的な態度を見せている。これは Prince の嫉妬心を悪戯にかきたてようという意図であったと考えることもできるし、また、もともと、彼女は Prince には男女の感情を持っていなかったのであるから、“his genius and his extraordinary *beaux yeux*” (RH p.181) を持つ Roderick に魅力を感じ、好意を持ち始めたとも考えられる。

そして、彼女が Roderick と二人で the Coliseum で話していたときに、彼女は理想の男性像について、“A man whom I can have the luxury of respecting! … one … to be large in character, great in talent, strong in will.” (RH pp.259-260) と話し、Roderick については以下のように語っている。

… I fancied you had the sacred fire … Ah, but so very little of it! It flickers and trembles and sputters; it goes out, you tell me, for whole weeks together. From your own account it does n't much look as if you'd take either yourself or any one else very far.” (RH p.260)

彼女がその中に理想の男性像を見い出そうとした Roderick ではあるが、彼は現状では順調に作品製作ができておらず、このような言葉はそのような状態の彼を励ますものではない。彼女は理想の男性が“a certain feeling — I have never had it, but I should know it when it came” (RH p.261) を与えてくれることを願っている。だから彼女がここで Roderick に与えた言葉は、製作不振に陥っている彼を非難し、更には煽り立てるような意図を持ったものである。彼女は Roderick に最初に理想の男性だと感じたように、あくまでも才能を伸ばし、優れた芸術家になることを期待し、最終的には彼女に未知の感情的経験をさせてくれることを望んでいる。だが現状はその思いを実現してくれる可能性を縮小していくようなものであるので、彼女は自分の腹立ちを彼に投げつけているとも考えられる。更に、“I'm sure you have never really chosen between me and that person in America.” (RH p.261) と言って、実際には彼の将来を共有することになる Mary Garland への嫉妬心をも見せている。

この直後に Christina は Rowland と Saint Cecilia 教会で会って Roderick について語り合い、Roderick との関係に関して彼女の態度を決める機会を与えられる。

彼女は Roderick の彫刻家としての可能性について Rowland とこのようなやり取りをしている。

… if he were very happy he would become very great ?”

“He would at least do himself justice.”

“And by that you mean a great deal ?”

“A great deal.” (RH p.283)

そして Rowland は Christina に Roderick と結婚するほどの気持ちが無いなら彼を放っておいてほしいと頼む。それに対して彼女は、“… as a friend … you think I can do him no good ?” (RH p.286) と尋ね、また、

I've had a horrid vulgar life. There must be some good in me, since I've perceived it, since I've turned and judged my circumstances.” (RH p.287)

と言っている。再度、Roderick の芸術家としての大きな可能性を教えられて、彼が芸術家の妻としての Christina を否定していることに対して、彼女は彼との関係を恋人として見るのではなく、友人として見るができることを Rowland に告げた上で、彼女は自身が自己の生活を客観視することができる以上、即ち、彼女が送ってきた生活を批判的に捉えることができる以上、他に有意義なことができる可能性を告げている。そして、

… tell me … shall you consider — admitting your proposition — that in ceasing to be nice to Mr. Hudson, so that he may go about his business, I do something magnanimous, heroic, sublime, something with a fine name like that ?” (RH p.288)

という問いかけをしている。それを実現するため彼女はすぐに Prince と婚約し、Roderick の彼女への希望を断ち切る。彼女は彼の才能をもう一度確認した上で、結局は Rowland の依頼を受け入れるのであるが、この時彼女に最終的に決意させたものは、Roderick にとって有益なことをすることで “something magnanimous, heroic, sublime” ができるということである。婚約後に、実行するに際して

… here's a magnificent chance for humility … It's what Saint Catherine did, and Saint Theresa, and all the others, and they're said to have had in consequence the most ineffable joys. (RH p.309)

と語っている。つまり非常に有能な人物のために自分が有意義なことをするにあたって、聖人の行為に自分の行為を例えているように、その行為が、非常に優れたものであるかどうか、彼女の決定の最も重要な要因となっているのである。そしてその行為によって喜びを得ることを期待している。ただ行為の価値については自分で判断するのではなく、Rowland に価値判断について問いかけている。

その後、Mrs. Hudson と Mary Garland がローマに滞在するようになったとき、Christina は Mary と会った後に Prince との婚約を突然解消するものの、すぐに人々の意表をついて結婚する。Mary の人格を理解し、それを高く評価し、Christina 自身も Mary の人生に対する態度と同様の態度を採ろうと決心するのであるが、彼女の高慢な自尊心を脅かす周囲の圧迫により挫折し

吉田：Roderick Hudson と *The Princess Casamassima* における Christina 像

ている。

Christina は Mary に会ってその印象を以下のように語っている。“… she has Repose …… Unfortunately I have n't Repose — ah, what would n't I give for it!” (RH p.378)、そして “… I admire Miss Garland more than any of the people who call themselves her friends — except of course you.” (RH p.379)、更に

… a certain number of intelligent people will find it one of the delightful things of life to look at her. That lot's as good as another. And then your friend has every virtue under heaven.” (RH p.379)

と語り、また、“She's full of intelligence and courage and devotion.” (RH p.380) と言っている。ここで Christina の言う安らぎとは、自分の人生に対する迷いや疑念、批判のない、確信を持った生き方であり、それは知性や、勇気、献身といった精神性によって支えられているものである。それは Christina が Rowland に “what you call in Boston one's higher self” (RH p.407) と表現した、アメリカ的な自意識であり、“It's bigger and brighter than the Casamassima diamonds — every one of which … I've seen and handled and adored.” (RH p.407) と言っているように、世俗的、物質的な価値よりも優れていると考えて、彼女はそれを選んでいるのである。それは、Rowland が Christina に Mary のことを話したときに、彼が彼女を賞賛していることに気付き、彼自身も非常に高く評価している価値観であることを知っている。

つまり、Christina は Rowland の依頼を受け入れて、Prince と婚約することで Roderick から遠去かったが、

“I like him very much … much more than I used to. Since you told me all that about him at Saint Cecilia's I've felt a great friendship for him. *Il n'est ni banal ni bête*; and then there's nothing in life he's afraid of. He's not afraid of failure; he's not afraid of ruin or death.” (RH p.408)

と言っているように、彼に対して強い関心を抱くようになり、Mary に会って彼女の人格の影響を受けてからは、

… I could adore him. I would nurse him, I would wait on him and save him all disagreeable rubs and shocks. I'm much stronger than he, and I would stand between him and the world. (RH p.409)

と言うように、彼に対する自らの態度を新たに示している。

Christina は Prince と結婚して得られるものよりも、はるかに価値が高いと考えられるものを選択したのであり、Mary がそこに安らぎを得ていると思うように、彼女も自分の生き方をそのように決めることで、その安らぎを手に入れられると考えたのである。そして、そのような決定は Rowland の高い評価に支えられたものを選択することであり、それは Roderick から離れることを決めたとき同様、彼女自身が自分の人生経験の蓄積の中から掘み取ったものでは

ない。この場合も他者や Rowland の影響を大きく受けているのである。

結局、Christina は彼女の高い自尊心が傷つくことを恐れたと推察されるが、Prince と結婚する。最も価値があり、そこで安らぎと充足を得て生きていくことができると考えた人生はすぐに実現不可能となり、スイスで Rowland 一行に出会ったとき、“I mean to cultivate delight …… I was in part the world's and the devil's. Now they've taken me all.” (RH p.492-493) と言って、今後の人生について語っている。そこには彼女が望んだ精神性は存在せず、快樂だけがあり、婚約を解消したときに、過去の自己について、“I'm corrupt, corrupting, corruption !” (RH p.407) と言っていたように、以前の状態に戻るものである。

最初に述べたように彼女は清純さをたたえる美貌とは裏腹に非常に複雑な性質であると人々に受け取られている。またそのことが他者を当惑させる原因にもなっているし、他者から見れば彼女の言動も一貫性のない矛盾したものである。しかし、彼女は、自分が現実に置かれている状況とは異質のものを手にいれて、そこに自分の人生、生き甲斐を見い出そうと試みているのである。

しかも、その過程で特徴的なのは、選択する行為とその行為に含まれる意義や価値について、いろいろな経験をして、自分で熟慮して選択するのではなく、他者から教えられたり、他者を真似たりするものであり、その意義や価値についても他者の判断や価値観に頼っている。いずれの行為も Roderick に利益と発展をもたらすという目的であるが、彼女が究極的にもっともこだわっているのが、それを実行する彼女自身が極めて優れた人間になるか否かということである。Prince との婚約破棄の後で自分の選択したものを Rowland に話し、最後に、“… tell me what you should finally think of me ? I should like you to tell me now.” (RH p.410) と尋ねたことは、彼が高く評価している価値観を選んだと告白することで、彼が彼女を十分に評価してくれることを暗に望んだものである。結婚後スイスで Rowland 達に出会ったときに、“I was very fine — is n't it true ?” (RH p.491) と問いかけているのも肯定の返答を期待しているのである。“You've seen me at my best …… I was sincere.” (RH p.492) と言っているが、現在は墮落していても、かつて彼女は一瞬であっても極めて優れた人間であったことを理解してほしいと強調しているのである。

つまり彼女は何かをする場合に、その対象となる他者や、その行為自体やその意義、価値よりも、突き詰めれば、それをする自身の人間性の評価という点に関してどうであるかということが重要なのであり、それは彼女自身の真の生き方を得ようとする熱意に勝る、自己に対する深い執着心の現れである。

Prince と結婚して貴族階級の一員となった Christina が描かれている *The Princess Casamassima* では、彼女はヨーロッパの革命家に接触する一方、ロンドンの下層社会の実態も知って、革命運動に直接、積極的に係わりようとするが、彼女の Hyacinth との関係や革命への参加の姿勢に、*Roderick Hudson* で見られたのと同様の心的態度、即ち自己に対する強い執着が

窺える。

まず、この作品でも Christina の人柄が他者にどのように受け止められているかを見る。

Hyacinth が Christina を “the most beautiful woman in England” (PC II p.28) と見るのは当然のこととして、現在は妻の行動を激しく怒っている夫ですら “… she's the only woman I've ever seen whose beauty never for a moment falls below itself.” (PC I p.272) と言っているように、そして彼女が出会う全ての人々が賞賛するように、美貌は相変わらず彼女の大きな特徴であり、それでもって人々を引き付けている。

Mme. Grandoni は彼女を長い期間観察している人物である。“… she's very perverse…” (PC I p.307) とか、“… she has some such great qualities.” (PC I p.272) と言って、基本的には Roderick Hudson のときと変わりのない見方をされていて、欠点も美点も捉えている。また、“Christina's active, various, ironical mind, with all its audacities and impatiences” (PC I p.303) という見方も更に加えている。

Christina の結婚直後から約 5、6 年間彼女を知っている Captain Sholto は “The courage of it, the insolence, the *crânerie* !” (PC II p.70) とか、“So far as the head's concerned the Princess is all there… she was the cleverest woman in Europe…” (PC II p.71)、あるいは、“the perfection of her indifference to public opinion and the unaffectedness of her originality” (PC II p.80) といった特徴を挙げている。

また Paul は、

“She's not only handsome, handsome as a picture, but she's uncommon sharp and has taking ways beyond anything ever known.” (PC II p.289)

と言っているし、Lady Aurora は “She might charm the world.” (PC II p.192) とか、“… most other people would be content — beautiful as she is.” (PC II p.193) というように評している。

このように *Roderick Hudson* に登場したときは様々な見方をされていたが、それと比較すると、基本的に他者が観察している Christina に大きな違いはない。稀な美貌で、頭脳が鋭く、率直でない。そしてそれらに、大胆、独立性、独自性という要素が加わっていることで、*Roderick Hudson* のときより精神的に強くなっていることが窺える。

Roderick Hudson では Christina が様々な見方をされることに彼女の生き方に関する特徴が見られたが、*The Princess Casamassima* では、人々の見方に大差はない。ここで問題となるのは、彼女が人々の信頼を得られないことである。その原因は、やはり、彼女の心的態度にある。それを明らかにするために、Hyacinth との関係と彼女の革命運動への係わり方について考えていく。

Christina が革命運動に加わる、個人的、直接的動機は Hyacinth に彼女が以下のように打ち明けたものであり、貴族社会から受けた侮辱である。

The position made for her among such people and what she had had to suffer from their

family tone, their opinions and customs ... had evidently planted in her soul a lasting resentment and contempt ... (PC I pp.294-5)

また、ヨーロッパ社会に対しては、

... her disgust with a thousand social arrangements, her rebellion against the selfishness, the corruption, the iniquity, the cruelty, the imbecility of the people who all over Europe had the upper hand. (PC I p.293)

という気持ちを抱き、現体制に批判的な考えを持つようになったと語っている。

しかし、彼女が劇場で Hyacinth に会ったことは、彼女の中にある矛盾を明白にしていく。このときの彼女の目的はロンドンの下層階級の一般民衆の現状を見ることと、また、“the subversive little circle in Bloomsbury” (PC I p.214) に入ることであったが、彼女の自宅に彼が訪れたとき、““The only objection to you individually is that you've nothing of the people about you — to-day not even the dress.”” (PC I p.292) と言っているように、彼女が期待していた一般民衆らしくない彼の意外性が、彼との関係、そして運動への係わり方を変える。

彼女が Medley に彼を招待したのは、彼に “a fine sensitive mind” (PC II p.15) があり、“a creature still open to every initiation, whose *naïveté* would entertain her” (PC II p.19) という理由からであり、“I wished to leave you free to amuse yourself.” (PC II p.36) と言うように、彼に地方の古い大邸宅の持つ歴史や美しさを見せて体験させ、どのような反応を示すかを知るためである。そして、“... you might have stayed in country-house all your life. You're much better than if you had !” (PC II p.60) と言って、そのような Hyacinth に見られるのは “natural tact and ease” (PC II p.60) であると語っている。つまり、彼女は、彼が下層階級の出身であるにも拘らず、上流階級の来訪者達にも見破れないほどその階級の人間のように Medley の環境の中に溶け込み、上流階級の歴史や伝統のある文化的遺産の持つ価値、美的価値を十分に評価し、それを享受できることを見抜いているのである。

彼が、革命蜂起に自分の命をかける誓約をしたことを告白したとき、

“I wish you had waited — till after you had been here ...

“Perhaps then you would n't have given away your life. You might have seen reasons for keeping it.” (PC II pp.45-46)

と残念に思っている。彼女は Hyacinth 自身が優れた資質を持っていることを良く自覚する前に自分の生命を限定してしまったことを悔やんでいる。また、彼に対して、“simply because I like you, for no other reason in the world” (PC II p.34) とも言って、彼に対して好意を持っていることも認めている。そして、

... when he should have played his part she would engage to save him — to fling a cloud about him as the goddess-mother of the Trojan hero used in Virgil's poem to *escamoter* Æneas. (PC II p.127)

吉田：Roderick Hudson と *The Princess Casamassima* における Christina 像

と彼女は言っている。

Hyacinth を Medley に招いた意図や、革命実現のために運動家としての彼を支援する、あるいは見守るというのではなく、既に組織の判断に委ねてしまった彼の命を救うということは、運動とは無関係の個人的な感情、事情によるものである。しかも、彼女自身が運動に深く関与しているのだから、彼女の個人的な都合で誓約を破るようにするというのは、彼女自身の革命に対する姿勢から考えて、矛盾する行為である。

しかし、Medley で、民主的にすれば彼と Princess Casamassima は対等であるという意識を Hyacinth に植え付けて、二人は非常に親密な関係になる。その後も彼女の革命への熱意は強まっていくが、彼に対する感情や考えは根本的に変化することはない。

パリやヴェネチアに旅行した Hyacinth は、文化的遺産を Medley とは比較にならないほど多く、深く鑑賞し、その価値を一層貴重なものとして考えるようになる。そのような彼は革命への意識がますます希薄になっていく。Christina は以下のように Anastasius Vetch との会話でそのことを良く分かっていると述べている。

I [Anastasius Vetch] wanted him to quarrel with society. Now I want him to be reconciled to it ……

“Ah, but he is ! …… “We often talk about that; he's not like me, who see all kinds of abominations. He's a bloated little aristocrat. (PC II p.242)

しかし、Christina は彼との交際を止めることはなく、“… the most remarkable woman in Europe was simply quite fond of him.” (PC II pp.268-269) や “Hyacinth … felt at times almost as if he were married to his hostess ……” (PC II p.269) と彼が感じているように二人の親密さは深まっている。

このような中で、Christina は Paul と接触することを実現させ、再度にわたって Hyacinth の命を救うことを試みる。最初は “Is it necessary to take a nature so delicate, so intellectual? Ought n't we to keep him for something finer ?” (PC II p.229) と彼の資質が優秀であることを理由に、“I should like to do it in his place ……” (PC II p.229) と身代わりを提案する。Paul は取り合わないが、彼女は組織に資金を提供するというので、彼とのつながりを維持しておこうとする。そして Hyacinth には、“You won't have to do it ……” (PC II p.274) と言って、彼が生命を失うことに直面する可能性がないことをほのめかし、彼を引き留めようとしている。

そして再び Paul が彼女を訪問したとき、彼女は自分の真意を彼に話している。Hyacinth の持っている “that pretty manners” (PC II p.295) をほめ、“He's a delightful nature, with extraordinary qualities.” (PC II p.295) と、彼女が彼をいかに高く評価しているかを語り、“I've an exceeding, a quite inexpressible regard for him.” (PC II p.298) と言って、彼への好意を率直に告白し、それが Paul と接触を持とうとした理由であることを告げている。その上で、Hyacinth への命令が取り消されるように頼んでいる。彼女は自分の願いが聞き入れられなくても、Paul

との接触を保ち続け、Hyacinthには“I know you won't be called …” (PC II p.404) と言って、彼も彼女自身も安心させようとしている。そして彼女の予想に反して、彼に指令が出されると、彼女は身代わりになろうとする。

要するに、彼女が Paul に Hyacinth のことについて擁護するとき、その理由としたのが、知性や繊細な感受性、優れた資質や、立派な物腰等であるが、Hyacinth の持っているこれらのものの大部分は、上流階級が長い歴史の中で作り上げてきた文化を理解し、鑑賞し、そこからその文化を背景としたものを創り出すのに必要なものである。即ち支配階層で尊重されているものである。それらは、例えば、Hyacinth が製作する芸術的な価値のある書物の装丁や、彼がこれから目指そうとした革命とは直接関係のない “a rare death song” (PC II p.156) のような文学などを創り出すものである。支配階層を倒そうとする彼が、その階層の存在を容認するような価値観を持つようになり、その変化は周囲の者達全員がよく知っている。そのような彼を Christina は救おうとするのである。結局のところ、それは彼女が否定する支配階層の持つ価値を守り続けようとすることである。彼女自身の行動は家財を処分したり、貧しい人々に金銭を分け与えたりと、運動の中に深く入り込んでいこうとするものであっても、彼女の心理の中には、Hyacinth を守ろうとすることで、支配階層が生み出したものを守る、即ち、支配体制を全面否定するのではなく、その一部を存続させようという意識が存在している。彼女は意識の中で全面的に革命運動に投じているのではない。墮落や腐敗は非難しても、文化的な面は、上流階級に固執しているのである。Paul が Christina に “… I think you're weary even now.” (PC II p.414) とか ““You'll go back to your husband!”” (PC II p.414) と言っているように、彼は彼女の心理を見抜いている。それゆえに彼は “You're not trusted …” (PC II p.413) と言っているのである。

次に、Hyacinth との関係以外のもので Christina の革命に係わる心的態度について検討する。

Christina の革命への動機は先に述べたが、彼女はそれによって実現される民主的な社会で生きることを願っているのであるが、それ以外に彼女の言動に革命運動そのものの中に、彼女自身の楽しみを求めようとしていることが見られる。

Hyacinth には “my looking for something fresh in other walks of life” (PC I p.297) についてこのように語っている。

The upper classes are so deadly *banals*. My husband traces his descent from the fifth century, and he's the greatest bore in Europe. That's the kind of people I was condemned to by my marriage. Oh, if you knew what I've been through you'd allow that intelligent mechanics … would be a pleasant change. (PC I p.291)

また、Madeira Crescent で下層中産階級の生活を始めてからは、Hyacinth に以下のように見られている。

She stopped as Millicent had done to look into the windows of vulgar establishments and

吉田：Roderick Hudson と *The Princess Casamassima* における Christina 像

amused herself with picking out the abominable objects she should like to possess ; selecting them from a new point of view, that of a reduced fortune and the domestic arrangements of the “lower middle class,” and deriving extreme diversion from the idea that she now belonged to that aggrieved body. (PC II pp.176-177)

Paul と秘密の集会に出かける時には、

… “I see I shall have much less keen emotion than when I acted by myself.”

“Is that what you go in for —— keen emotion ?”

“Surely, Mr. Muniment. Don't you ?” (PC II p.291)

というように話している。

彼女は、運動に参加し、今まで知らなかった階層の人々、知らなかった世界を知り、経験したことのないことを現実に体験することで、上流社会の退屈さから抜け出し、未知の楽しみを味わい、そして生きていることを実感しようとしていると考えられる。しかも観念的には革命に対する考えを熱狂的にとうとうとまくしたてるが、現実的には、夫の経済的援助を自ら断つことはなく、経済的に困窮していず、称号も持ったままで、夫の属する階層と絶縁することなく、下層階級の苦境を現実のものとして実感していない。つまり、彼女は疑似体験を楽しんでいるのである。

上流社会で自分の生き方を見つけることのできなかつた Christina は、革命と大衆社会の中でそれを見い出そうとしている。このような彼女の心理の真相は、革命実現のためや、他者のためではなく、自分の生きがいのためなのである。彼女自身が生の実感をつかみ取るためである。

彼女は始めて Hyacinth に会ったとき、このように言っている。

“I wish I could make you trust me —— inspire you with confidence …… “I don't mean only you personally, but others who think as you do. (PC I p.219)

彼女は自分の革命に対する熱意を階級を越えて一般大衆に属する人々に信じてもらいたいと思っている。しかし、あくまで夫の経済力に依存し、地位も捨てず、また、Mme. Grandoni も Paul も指摘しているように Christina がそう思い込んでいるだけの以前より非常に水準を下げた生活や、また本心ではそのような生活を全く好んでいないことは、上流階級を崩壊させたいという彼女の言葉に反している。そのため実際に庶民の生活をしている Paul や Schinkel など、彼等の仲間からの信用を得ることはできないのである。

要するに、彼女の革命参加の姿勢は、本当に貴族階級を離れた自分と大衆の真剣な運動という状態になっていないのである。彼女の生きている実感を得るためのものである。彼女は一般大衆の信頼を得て、彼等の仲間として革命に参加しようと考えているが、彼女の心理の中には、完全に大衆の側に与することのできない部分がある。革命を目論む者達とは敵対関係にある支配階層に顕著な価値観を擁護し、また、大衆の現実の苦難を実感するよりも、むしろそれを自分のために楽しもうとする部外者的な心理でいることは、大衆の信頼を得ることを大きく妨げ

ている。そういった彼女自身の欲求が目的に反することを自覚し、その欲求の存在を自分自身で解決することができないということは、彼女が自己に拘泥しているからなのである。

Roderick Hudson と *The Princess Casamassina* を通して描かれた Christina という女性は第一にその際立った美貌ゆえに多くの人々の関心を集めるが、そうであっても彼女自身は決して真に幸福ではなく、自分の納得する生き方を見つけることができないでいる。その原因は、これら二作に共通して見られたように、彼女が自分自身のためだけでなく、他者のために、彼女にとって多大の犠牲を払って何かをしようとし、そこに真の人生を得ようとしても、その心理の根底に、常に目的とは直接関係のない、彼女自身の欲求に固執する部分が存在していることである。

Roderick Hudson の場合は、彼女の選択する行為が彼女の自尊心を十分に満足させるか否かが決心をするに当たって重要な要素になっている。*The Princess Casamassina* に於いては革命で支配階層を倒そうと決意しても、上層階級が築き上げた文化に見られる審美的価値を否定することはできないでいる。また革命運動では、目的達成よりもむしろその活動に参加することに、自分自身の生の充足感を見い出そうとしている。

結局、いずれの作品に於いても、自己に執着し、自己を乗り越えることがないために、彼女にとっての真実の人生を見つけて、生きることができないでいる。ここに繰り返し生じる彼女の悲劇の根源を見ることができると考えられる。

Notes

- (1) 拙論の引用は New York 版に依る。以降、作品名は *RH* の記号で記し、作品からの引用の頁数は、引用文直後の () 内に示す。Henry James, *Roderick Hudson* (re-issued; New York, New York: Augustus M. Kelley · Publishers, 1971)。
- (2) 拙論の引用は New York 版に依る。以降、作品名は *PC* の記号で記し、作品からの引用の頁数は、引用文直後の () 内に示す。Henry James, *The Princess Casamassina* (issued; Fairfield, New Jersey: Augustus M. Kelley · Publishers, 1977), I, (reprinted, 1978), II.
- (3) Henry James, *The Art of the Novel: Critical Prefaces* (New York: Charles Scribner's Sons, New York, c1962), p.19.